春は熱海から来る

一字一筆　静岡の今

何年ぶりかで「熱海行き」の切符を買った。長年、静岡市と東京を暮らしと仕事の拠点にしていたので、私にとって熱海は「通過駅」であり、伊東、下田市など伊豆半島東部に行くときの「乗換駅」だった。

熱海への旅情をかき立てられたのは、昨年11月下旬に新駅ビル「ラスカ熱海」がオープンしたからである。どこかに「昭和」や「明治」の香りを漂わせてきた熱海の玄関口が、近代的デザインのビルに生まれ変わったという。年が明けると、早咲きで知られる「熱海梅園」の梅が早くも三分咲きとか。せかされるように熱海に向かった。

新幹線熱海駅で降りて地下道を抜け、改札口を出るとそのまま「ラスカ熱海」の入り口につながる。3階建て東西約140㍍、奥行き約20㍍のビルの中に土産店、レストラン、「伊豆・村の駅」など36店舗が並び、ドラッグストアや百円ショップもある。まるで食を中心にした小型デパートが誕生した感じである。

熱海市はオープンに合わせ首都圏からの観光客誘致活動を強化し、ホテル旅館業界も夏の海上花火大会を3月から毎月開催する。「伊豆は一つ」のスローガンを掲げる県も、熱海玄関口の活性化は伊豆半島全域のイメージアップにつながるとして、半島全体の観光案内所の機能を期待している。

梅園に足を延ばすと、開花が例年より2週間早いという紅白の梅が待っていた。黄色い蠟梅（ろうばい）も彩を添える。「いつも工事中」のイメージだった熱海駅前に戻ると、ドレスアップした駅ビルから吐き出される観光客の表情が明るく見えた。間もなくこの駅は、早咲きの河津桜に押し寄せる花見客でにぎわう。

「静岡の春」は、熱海からやって来る。

（前静岡県監査委員・富永久雄）

新装して迎春――正月の観光客でにぎわう熱海駅ビル＝熱海市、全日写連竹之内範明さん撮影